

思想の学と書物の学と——パネルセッション編成の趣旨——

高橋 章則

今日、日本思想史研究には様々な視点や方法・スタイルがあり、研究領域も拡大している。その広範な領野をなそうとする「思想の学」の研究にあつて主流をなすのは、やはり思想家の代表的著作をめぐる研究者の「読み」の確実さと独自性の競演であり、基本著作以外の様々な種類の「書物」への検証や「書物」そのものの意義付けの問い直しはいまだに留保されているかに見える。

さまざまな提言はあるものの、フランスの「読書の文化史」が提起した「テキスト」と「書物」との差異や行為としての「読書」を「思想の学」の局面から掘り下げて検証したり、新たな「書物」の発掘などを通して「思想の学」の新生面を模索するといった試みは決して多くない。「読

書の文化史」が祖上にのせた地方蔵書家の蔵書目録や遺産目録あるいは出版資本が増殖する段階で発行した雑多な「書物」など思想家の関係などについての検証は、かろうじて研究の緒についたというのが実状である。

しかし、こうしている間にも将来の「思想の学」存立の基盤をなすであろう「書物」群は行き場を見失い、経済原理の中に埋没し流浪したり、憔悴しモノとしての生命を落としていたりしているのである。今日しばしば問題とされる史料アーカイブの問題に「思想の学」は早急に関わる必要があるのである。

ところで、旧来の「書誌学」の研究分野にあつては、「貸本屋の研究」や「地方出版の研究」「蔵書家の研究」と

いった形で、従来の出版史や文献研究から一歩踏み出した広範な「学芸史」の領域へと検証の対象を拡大しているかに見える。これを「書物の学」と名付けるならば、その学にあつては、「書物」の置かれた社会的な基盤や「書物」そのものが果たす社会的機能ないしは文化的な機能に着目して幅広く「書物」の特性を研究する方法をとる。「読書の文化史」との親和性の高い研究が展開し学問的な魅力を高めている。

さて、こうした「思想の学」と「書物の学」とが交差する空間をどのようにすれば構築することができるのであるうか。

本パネルセッションでは、「医学」なканなく医学館に関連した「書物」の多様な享受の実態について町泉寿郎が、伊勢周辺の鈴屋門弟を中心に「国学」の「書物」がいかなる文化的な機能を果たしていたかをめぐっては高倉一紀が、地域に定点をおいた「書物」の蓄積と文化的な機能の問題について高橋章則が報告する。

それらの報告が目指すのは、「書物」研究の成果を包摂した新たな「思想の学」の確立に向けた研究の新局面・具体局面の提示にある。

その要点となるのは、いわゆる思想家のような「思想」発信の手段を保持するものだけでなく「思想」を享受し

たものの意義を「思想の学」の研究局面として積極的に位置づけること、すなわち思想的な営為の外延部を具体例に即して示すことである。また、それらを出版や収蔵などの「書物」をめぐる諸々の問題と関わらせて論じることである。

広汎な思想的な営為を「書物」の誕生から死にいたる様々な局面と関わらせて論じることが「思想の学」を豊かにする、というのが本パネルセッションを構成した基本的な立場である。

(東北大学専任講師)